1．大人とこども

明日、学校が終わったらそのままうちに泊まりにおいでよ。クリスマス、一緒にやりたいんだ。

蒼士（そうし）がそう言ってきた。

千秋（ちあき）は蒼士（そうし）のベッドの上でダラリと横になりながら、蒼士（そうし）が飽きることなく頭を撫でてくるのを好きにさせていた。

「そうちゃんち、親は今年も旅行？」

「そう」

「そっか」

昨年までは、冬休みになると蒼士が毎日のように遊びに来てい

たのを思い出す。初詣も、蒼士は千秋の家族に交じっていつも一緒に行っていた。
毎年蒼士の母親は実家へ、父親は海外旅行に行っているようだが、蒼士はどちらにも行きたくないと、家に一人――と言っても使用人は沢山いるのだが――残っているのだと言っていた。
「いいよ。今年は、そうちゃんち行くよ」
あの広い屋敷に一人でクリスマスを過ごすのかと思うと、そう答えるしかない。それに蒼士は笑った。
「大丈夫だよ」
「え？」
「ちーくん優しいから、俺のこと一人で可哀想って思ったでしょ」

千秋は答えようがなくて、苦笑いをした。
「毎年家に残ってるのは自分の意思。貴重な冬休み、ちーくんに会えないなんて我慢できないからさ」
千秋は蒼士の言葉に顔を赤くすると、ふいっと蒼士に背を向けた。
蒼士は千秋がむず痒くなるほどに、甘い言葉を吐く。それは段々と酷くなっているように思えて、一緒にいればもう少し冷めるだろうと思った蒼士の執着は、冷めるどころか酷くなっているようにも思えた。
「でも、弟達もクリスマス楽しみにしてるから、一日は家族と過ごす」

「じゃあさ、うちに連れてきなよ。美味しい物、沢山用意する」
「いや、それは……」
「ね、お願い」
後ろから抱きしめてくる蒼士が、頬にチュッチュとキスをしてきた。必死な様子が可愛らしい。家族だけで過ごすのは二十五日の夜でいいかと思い、千秋はうなずいた。
「じゃあさ、二十五日の夜にクリスマスやるから、そうちゃんがうちに来なよ」
「うん。そうする。嬉しいな」
顔を見なくても蒼士が笑っているのが分かる。千秋もそれに笑いながら目を閉じた。千秋の体のことを考えセックスは三日に一

回としたが、それでも終わった後は体が気怠くなり、すぐに眠くなる。
千秋は眠りに落ちていきながら、このまま蒼士とはずっとこうやって、家族のように過ごしていくのだろうと、漠然とそう思った。
半年前には考えられなかった。しかし今では、蒼士といるのが当たり前になっている。
色々とあったが今はそんな毎日が幸せだと思う。蒼士は相変わらず千秋を深く愛してくれている。それと同じくらい、いやそれ以上に返したいとは思っていた。
「そうちゃん、大好き」

小さな声で呟くと、蒼士がぎゅっと抱きしめてくれた。

翌日、学校が終わると、小湊家の車が迎えに来てくれて蒼士の家に行った。

蒼士の家は豪邸だ。門の前を通ったことはあったが中に入ったことはない。門から中を覗き込むと玄関前まで距離があるのが分かるが、防犯のためか、あまり中を見ることはできないのだ。

初めて入った屋敷の中は想像どおりに、いやそれ以上に豪華な内装や広さであった。ここで働く母からは大きな家と聞いていたが、雇い主の情報を家族にも言わない実直な母からは、それ以上

を聞いたことがない。
「凄い。外国の豪邸みたい」
「そう？」
口を開けて室内をキョロキョロと見回す千秋の肩を、蒼士は抱き寄せた。
「あ、ごめん。不躾だった」
「ううん。いくらでも見て。俺の家にちーくんがいるのがなんだか信じられない。嬉しいな」
蒼士の言葉に千秋が笑うと、蒼士は千秋のこめかみに唇を落としてきた。
蒼士に案内された部屋に通されると、そこはパーティー会場の

ように華やかな装飾がされており、大きなクリスマスツリーが飾られ、テーブルにはご馳走が並べられている。
「大きな部屋だね」
「パーティー用の部屋なんだ」
「パーティー用って、セレブすぎ」
乾いた笑いを浮かべる。一体何部屋あるのだろうかと考えたが、聞いても仕方ないと思って聞かなかった。
テーブルの上には沢山のご馳走が並べられている。大きなケーキもあった。チキンは一匹丸ごとだ。
「誰か来るの？」
千秋が聞くと、蒼士はニコニコ笑いながら首を振った。

「来ないよ」
「でも、凄いごちそう」
「ちーくんのために、作ってもらったんだ。フレンチにした」
千秋はなんて言っていいか分からずに、そう、とだけ答えた。
蒼士は千秋の顔を覗き込むと、心配そうな顔をする。
「どうしたの？　嫌いだった？」
「ううん。食べたことないし、嫌いかどうかもわからない」
「でも、あんまり嬉しそうじゃない。外に食べに行こうか」
千秋は慌てて首を振ると、どう説明してよいか困った。蒼士はどうも、勿体ないという感覚が薄い。もっとも、千秋の家よりも広い部屋に通された今ではそれも仕方がないと思う。蒼士と千秋

はあまりにも育ちが違うのでこういうところは分かりあえないのだろう。
案の定、食べる物は大量に余ってしまった。勿体ないくて余ってしまった食事をじっと見る。
「残り物は明日うちで食べようよ。持って帰ってもいい？」
「明日はせっかくだから、ちーくんのお母さんの料理が食べたいよ。ちーくんのお母さんの料理、大好き」
「でも、弟達にも食べさせてあげたい」
蒼士は千秋をぎゅっと抱きしめると、可愛いなぁと呟いた。
「優しいね。じゃあ、今度作らせて持って行くよ」
「ううん。そこまでの話じゃないよ。ごめん、なんでもない」

そういうことじゃないんだと思ったが、感覚が合わないのはどうにもならない。言っても仕方がないことだと諦めたが、余った料理は廃棄になると思うと罪悪感が湧いてきた。ここに来るまで楽しかった気分が少しだけ下がってしまう。

蒼士はそんなことをお構いなしに千秋の腰に手を回してくると、額と頬にキスをしてきた。手が後ろに回ってきて、服の上から尻を刺激される。千秋は驚いて体を離した。

「ちょっ、ここじゃ駄目だよ、そうちゃん」

「でも、我慢できなくなっちゃった。ね、しようよ」

「我慢できないって、でも、昨日したし」

「ごめんね。でも、ちーくんとだったら、いくらでもしたい」

蒼士は再度千秋を抱きしめると、背中に手を回してきて、強く力を入れてきた。
蒼士の匂いがする。爽やかなオレンジのような匂い。それに千秋はうっとりとして目を瞑った。
「そうちゃんってさ、こんな爽やかそうな顔して絶倫だよね」
「そうかなぁ。多分、余計な性欲が無いんだろうね。全ての性欲がちーくんにのみ向けられちゃうの。性に目覚めた瞬間からさ、俺は対象が全部ちーくんだったから、もう仕方ないよ」
それはちょっと、いやかなり怖いと思って引き攣った笑いを浮かべた。
「歪んでるって言うか、陰湿って言うか……完璧な人ほど、変態

なのかな」
千秋が正直に思ったことを口にすると、蒼士は「酷いなぁ」と言って笑った。
蒼士は千秋を窓際まで連れて行くと、千秋の体を窓に向かせる。窓からは芝が敷かれた庭が見えた。完璧に手入れされた、広く美しい庭。千秋に価値はよく分からないが、金がかかっていることだけは分かる。
庭に見とれている千秋を気にもせず、蒼士は千秋のベルトを外すと、手早く下着ごとズボンを下ろした。
「や……そうちゃん……」
蒼士は千秋の尻を少し自分の方に引き寄せると、ひざまずいて、

千秋の腿の後ろに舌を這わせてくる。そのまま臀部まで舐め上げると、双丘を割り開き、後孔を舐めてきた。
「だめ……や……」
窓ガラスに上半身を預けるようにして、千秋は蒼士の舌の感触に耐えた。
「気持ちいい？」
千秋はそれに、素直にうなずく。かかる息も気持ちが良い。知らず腰が揺れてしまっていた。
「ちーくんも、充分に変態だ」
「そうちゃんのせいだろ」
「そうだね……ごめんね」

蒼士はどこか嬉しそうに言うと、ポケットからローションを取り出し、それを手にたらした。
「そんなの、いつも持ち歩いてんの？」
「いつでもできるようにね。ちーくんのここは女の子だけどさ、濡れるのは無理だから」
「だったら女の……ん」
指が後孔に滑り込んできて、千秋は続きを言うことができなかった。
何度も嬲（なぶ）られてきたそこは、蒼士の指を容易く受け入れる。増やされた指は千秋の肉壁をかき分けていき、千秋は抑えきれない嬌声を漏らした。

「入れるよ」
蒼士は千秋の後孔に屹立を当てると、ぐいっと突き上げてきた。千秋は窓ガラスに額を押しつけ、尻を突き出しながら、蒼士の動きに目を閉じる。
リズミカルに突き上げてくる動きに、千秋も腰を振った。蒼士は千秋の感じる場所を知り尽くしている。そこを何度も擦(こす)られ、千秋は堪らず、己のペニスに手をかけた。
激しく擦(こす)り上げると、そこはすぐに白濁を吐き出す。透明に磨かれた窓に白い液体がかかった。目を開けると綺麗な庭が目に入り、それがさらにこの行為を淫猥なものにしていく。
蒼士が千秋の腰をつかむ。動きが速くなり、ぐっと奥まで突き

上げてくると、千秋の中に射精した。
「ちーくん、大好き」
千秋の中に挿入したまま、蒼士は千秋の体をぐいっと引き寄せ、頬にキスをしてきた。千秋が振り返ると、今度は唇にキスをしてくる。舌を絡め合いながらキスをすると、蒼士は千秋から自身をゆっくりと引き抜いた。
千秋がその場に崩れ落ちると、蒼士もしゃがみ込み、千秋のペニスを舌で舐めて綺麗にする。
「部屋に行こうか」
千秋がうなずくと、蒼士は無邪気に笑った。

＊

冬休みも最終日になり、千秋は寮に戻った。蒼士はもう自由登校だというのに、一緒に寮に戻ってきている。

「俺がいないと、ちーくんが何をされるか分からないから」

それが蒼士の言い分だが、千秋と離れたくないのだろうことは千秋も分かっていた。

千秋は荷物を自分の部屋に置くと、すぐに蒼士の部屋に行き、床に座って一息ついた。家に帰ってきた気もするし、旅に出ているような気もする。

蒼士は千秋の隣に座ると、頬にキスをしてきた。寒いね、なん

て言いながらべったりとくっついてくる蒼士は、あんなに大人びていたのに今ではすっかり子どものようだ。
「クリスマス、楽しかったね」
蒼士が同意を求めるように言う。
「そうだね」
「お正月も楽しかった」
「そうだね」
千秋も楽しかったと思い出し、明日から三学期が始まるのが憂鬱になった。
そういえば蒼士は、将来どうする気なのだろうか。一緒に過ごすと言っても、蒼士の進路を聞いたことがなかった。

「ねぇ、そうちゃん、進路、どうするの？」
千秋は気になっていたことを、とうとう聞いてみた。千秋から聞き出すことでもないと思っていたが、それにしても何も言わなさすぎる。
「決めてないよ」
「え？　でも、センター試験は申し込んでるよね」
「一応ね。でも、行きたい大学がない」
「何言ってんの。もう一月だよ。出願だって始まる」
蒼士はいっとき、勉強らしい勉強もしていなかったが、千秋がパピーになってからは受験勉強にかなりの時間を割いていた。今更何を言い出すのだろうか。

「そうだ。その話しようと思ったんだ。ちーくんは、どこの学校がいいかな」
蒼士は机の引き出しから封筒をいくつか取り出すと、それをテーブルに広げた。何かと思って見てみると、高校案内のパンフレットがいくつかあった。
「転校する学校だよ。今更家に帰っても窮屈だろうから学校が決まったら一緒に住む場所を決めよう。だから、場所は気にしなくていいよ」
ニコニコ笑って言う蒼士に、突然何を言い出すのだと思って千秋は慌てる。
「そうちゃん、ちょっと落ち着いてよ。大学は？」

「ちーくんの学校の近くにするよ」
「そうちゃん、俺を転校させるって本気だったの？」
「決まってるだろ。こんな所に置いておけない」
「でも、学費とか、手続きがあるから母さんに言わないと」
蒼士が千秋の肩に手を回すと、自分の方に引き寄せ、ぎゅっと抱きしめてきた。
「学費は勿論、俺が持つよ。手続きも心配しないで。色々と巻き込んじゃったからね、責任は取らせてもらわないと。ちーくんのお母さんに迷惑はかけられない」
千秋は蒼士の言葉に、首を振った。
「何言ってんの。そんなの……」

「お願い」
千秋は蒼士から体を離すと、蒼士の顔をじっと見た。千秋を見る目は優しいが、その目の奥には、未だに不安そうに揺れる色がある。千秋がここまで与えても、まだ蒼士は満足していないのだ。
「でも、そのお金は誰のなの？」
「俺のだよ。それくらいの貯金はある」
「でも、それは、そうちゃんのお金じゃないよね」
蒼士は首を傾げて、何を言っているのだという目で見てきた。
「俺の金だよ」
「違うよ。そうちゃんのお父さんのお金だろ」
「でも、俺の金だ。どんな形で手に入れても、俺が使っていい金

だよ」
千秋は、蒼士と意見を合わせるのは無駄だと思って、ため息をついた。
「いいよ。そこまでして、転校しなくていい」
「何言ってんの？」
蒼士が少し声を荒らげる。千秋は蒼士の目をじっと見た。
「俺がいなくなったら、ちーくん、クイーンになるんだよ？　こんな所に置いておけるわけない」
「わかってるよ。でも、だからってそれじゃ、そうちゃんの愛人だよ。そんなの嫌だ」
蒼士は千秋の肩にこめかみをつけると、猫のようにグリグリと

擦りつけてきた。
「じゃあ、お願いさせて。俺のためにお願い。ちーくんがうん、って言ってくれなかったら、俺は死んじゃうよ」
「大げさだな」
「大げさじゃない」
千秋は蒼士の頭を撫でながら、テーブルのパンフレットを見た。封筒の住所に目を通していき、以前蒼士が行きたいと言っていた大学の近くにある高校を選び、それを蒼士に渡した。
「ここでいいよ」
「え？」
蒼士は驚いた声を出して、顔を上げた。

「そんな簡単に。中身も見てないし、学校も見に行ってない」
「そんなの見に行ってたら、そうちゃんの受験に間に合わない」
「俺は別に浪人しても……」
「それに、どこにいっても、ここよりはマシだ」
蒼士の言葉を遮るように言うと、蒼士は一瞬だけ顔を歪め「そうだね」と呟いた。
「でも、約束だ。ちゃんと受験してよ」
「わかった。約束する。じゃあ、この学校に行けるように美園さんに手続きしてもらうから」
千秋は「はい」とも「いいえ」とも言わずに、再度甘えてくる蒼士の頭を撫でた。

「じゃあ、そろそろ戻るね」
「え、もう少しいてよ」
「約束したよね。ここに来るのは二日ごとだよ」
「そうだけど……」
「休み中、ずっと一緒だったでしょ」
立ちあがった千秋の手を名残惜しそうにつかむ蒼士に、千秋は酷く不安になった。
このままでいいのだろうかという疑問が頭をよぎる。千秋を手に入れた蒼士は落ち着くと思っていたが、ますます千秋に依存をしていっている。だが、恋人同士がお互いを必要にしたからといって、何もおかしなことではないのだと、自分に言い聞かせて不

安をそらした。
「じゃあ、またね」
まとわり付く視線を振り払うように、千秋は蒼士の部屋を後にした。
「久しぶり」
自分の部屋に戻ると、すでに帰ってきていた龍誠はいつものようにベッドに座り、スマートフォンをいじっている。千秋に気がつくと視線を上げて、手を上げた。
「久しぶり。冬休み、何してたの？」
千秋が自分のベッドに座って聞くと、龍誠はスマートフォンをベッドに置いた。

「地元の友達と遊んでた。千秋は？」
「俺も……」
地元の友達と遊んだと答えたかったが、考えてみたら、地元の友達とは会わずにほとんど毎日蒼士と一緒にいた。
「小湊先輩と一緒だった？」
龍誠の表情が、どこか人を小馬鹿にしたように変化した。
「まぁ、そうだけど」
千秋が気まずそうに答えると、龍誠はふーんと言って、ゴロリと寝転がった。
「付き合いたてのカップルみたいだな。仕方ないか。でも、気をつけろよ。千秋は友達多いタイプだろ。ずっと小湊先輩とばかり

いたら、残るの、小湊先輩だけになるぞ」
「そうかな」
「まぁ、あの人がそういう風にしているようにも見えるけど」
龍誠がこんなことを言うのは珍しい。いや、苦言を呈することは多いが、蒼士との関係を否定されることは今まであまりなかった。
「そうだね」
千秋は答えながら、龍誠の言うとおりだと思ったが、変えられる自信もなかった。千秋も蒼士もお互いに依存し合い、抜け出せない所まで来ている。お互いを失ったら何も残らないこの関係は、やはり歪(いびつ)なのだろう。

「小湊先輩は、どこの大学に行くんだ」
「知らない」
「聞いてないのか？」
「うん」
「お前はどうすんだ。転校するのか」
「それも分からない」
千秋は、転校すると言い切ることができなかった。いや、どちらでよいと思ったのだ。自身のことにここまで投げやりになる自分が考えられないと思いながら、寝転がりながらこちらを見てくる龍誠の目を見た。
龍誠は、いつもの皮肉めいた表情を浮かべていると思ったが、

特に表情を変えることはなく、それどころか、苛立った顔をしていた。
「分からないって……自分のことだろ」
「そうだよな」
千秋が自身に呆れるように言うと、龍誠はため息をついた。
「じゃあ残れよ」
「残れって？」
「学園に残れ」
「でも、そしたらちょっとまずいかな。ほら、俺、みんなに嫌われてるから」
「まずくない。前から言ってるけど、俺のパピーになれよ」

千秋は、じっと見てくる龍誠の視線から逃れるように顔を伏せると、膝に置いた手をぎゅっと握った。

「まだそんなこと言ってんの？　あんなことあったのに」

思い出したくない出来事を、千秋はあえて口にした。あの時のことを、龍誠と話したことはなかった。話すことなど、到底無理だったからだ。

醜態をさらした千秋と、理性をなくした龍誠が、友人として付き合っていくには無かったことにした方がいい。

「あんなこと、二度とさせないためだ」

龍誠が不機嫌そうな声を出す。そういえば龍誠は、入学当初から千秋をパピーにすると言っていた。守るためだという。今更な

がら、何故龍誠は同室というだけで、千秋にそこまでしてくれるのだろうかと考える。
蒼士の話では、龍誠は中等部の頃に大勢に輪姦(まわ)されたという。蒼士は、自分が味わった悲惨な思いを、他人にさせたくないと考える人間だと、龍誠のことを評している。そして千秋も、龍誠については同じように感じていた。もしそれが理由だとしたら、龍誠という人間は懐が広く、千秋には真似できないような善人なのだろう。
「ありがとう」
千秋が笑うと、ようやく龍誠も笑った。目じりを下げて笑う、いつもの笑顔だ。幼くなったその表情に、千秋はほっとする。

「今日は小湊先輩のところに行かねぇの？」
千秋がベッドに横になると、龍誠は起き上がって千秋のベッドの端に座った。
「うん。三日に一回行くことにした。龍誠の言うとおり、毎日は行き過ぎだと俺も思う。ちょっと減らそうと思って」
「そっか」
「うん」
千秋は、もし龍誠がマスターになってくれるとしたら、このまま学園をやめず、蒼士に頼らなくても済むかもしれないと思う。
いや、駄目だ。これ以上龍誠を巻き込めない。あんなことに巻き込んだ龍誠に、これ以上我が儘など言えないと思った。

「でも、ほんと、考えておけよ。小湊先輩の力で転校したら、このまま一生小湊先輩から逃げられない気がする」
龍誠が再度言ってくる。さっぱりとした性格で、どこか達観している龍誠にしてはしつこいと思った。
「そうだね。わかってるよ」
千秋が呟くと、龍誠は千秋のベッドに移動してきて座り、寝転がっている千秋の顔を見下ろしてきた。
「本当にわかってるのか」
千秋の手首をベッドに縫い付けるようにつかんできた龍誠に、千秋は体をびくつかせた。
「龍誠？」

「あんなことされて、悔しくないのか。これじゃあ、このままずっと、一生小湊先輩の奴隷だ」
「離せよ。お前、勘違いしてる。俺とそうちゃんは、そんなんじゃない」
「じゃあ、どんなんだよ」
龍誠が手を離したので安堵する。一瞬感じた龍誠の中の雄から目をそらし、起き上がって龍誠の隣に座った。
「俺さ、入学する前から同室の奴が奨学生だって知ってた。本当言うとさ、関わらないようにしようって思ってたんだ」
「そうなんだ。でも、龍誠は違ったよな」
「だってさ、お前、良い奴なんだもんな。初めて会うっていうの

に、あんな笑顔で挨拶してさ、反則だよ」
何を言っているのだと思って、千秋は苦笑した。
「何言ってんの。変なの」
「いや、お前は自分で自分がわかってないんだよ。可愛い顔でにっこり笑ってさ、指無いんだってあっけらかんと手見せてきたりして。やせ我慢かと思ったけど、ホントに気にしてないのな。俺はお前だから守ってやりたいって思った」
「何、その最高の褒め言葉」
龍誠は真剣な表情を崩すと、千秋の髪をぐしゃりと撫でてきた。
「もし小湊先輩がいなかったら、惚れてたかもな。まさかあんな面倒臭い人に取り憑かれてると思わなかった。残念」

軽い口調で言う龍誠に、千秋も笑うと、龍誠の腕に軽くパンチした。
「面倒臭いって、ほんと、そうだよな。取り憑かれているっていうのも、ピッタリ」
「だな」
一瞬だけおかしくなった空気が和んだのに安堵する。龍誠は無くしたくない友人だ。信頼もできる。だからこそ龍誠の手を借りて、ここに残ってもいいのではないかと迷ってしまう。
龍誠のゆったりとした笑顔を見た。その顔を見て、いや、そんなことは絶対にできないと思った。そんなことすれば。また龍誠を傷つけることになるだろう。千秋はだからこそ、決意した。

「ごめん。嘘言った。本当は、さっき、そうちゃんと決めたんだ。転校する」
「え？」
「気使ってくれて、ありがとな」
「マジか？　それ、考え直せよ」
「いや、決めたよ」
「いや、駄目だ。ちゃんと考えろ」
「考えたって」
龍誠は、下を向くと、後頭部をガシガシとかいた。
「出たよ。お前の頑固なところは、本当にやっかいだからな」
龍誠は独り言のように呟くと、自分のベッドに戻って横になり、

スマートフォンをいじり出すと、もう千秋には話しかけてこなかった。

＊

千秋が教師に呼び出されたのは、五限目の予鈴が鳴ったときだ。授業中に呼び出されるなど普通じゃない。嫌な予感がしながらも、校長室に向かった。

千秋を呼び出した担任が後ろからぴったりとついてくる。ますます嫌な予感がすると思って校長室の扉をノックすると、返事が返ってきたので扉を開けた。

「……かーちゃん？」
部屋の中には、校長と教頭と千秋の母親の亜由美（あゆみ）、そして蒼士と蒼士の父親の健一（けんいち）と、顔を見たことない五十代くらいの男が一人いた。
何を言われるのかと思い、背筋がひんやりとする。教頭がこちらへ、と言っているが、とても歩き出す気にはなれなかった。
「ここに座りなさい」
もう一度教頭が促し、ようやく千秋は歩き出すと亜由美の隣に座った。
席は、千秋の隣に亜由美が座り、その隣には健一が座っていた。蒼士は千秋に一番離れて座っており、対面では校長と教頭が座っ

ている。もう一人の男は、蒼士の隣に椅子を出して座っていた。
「集まっていただいたのは、真実をお聞きするためです。昨日、私宛に、差出人不明の手紙が届きました。こちらです」
手紙のコピーを渡され、亜由美と健一が受け取った。
二人ともそれを読んだようだったが、読み終えると、健一は顔色一つ変えずにそれを蒼士に渡す。一方亜由美は、何度もそれに目を通した後、その紙を二つ折りにしただけで千秋に見せてくることはなかった。
「かーちゃん？」
「申し訳ございません。ここに書かれていることが事実であれば、ここに蒼士君がいるのはおかしくありませんか。千秋と二人で話

をしたいので、どこか場所をお借りできないでしょうか」
校長と教頭は顔を見合わせると、校長がうなずき、教頭が相談室に二人を連れて行った。相談室に入ると、座る間もなく千秋は亜由美の顔を見て言った。
「何書かれてるの、それ」
「とりあえず座りましょう」
亜由美が椅子に座ったので、机を挟んで、向かいに千秋も座った。
「千秋、心配しないで本当のことを言いなさい。もし、困っているなら、このまま家に連れて帰るから。誰にも、何もさせないから、大丈夫」

「何言ってんの」
千秋は、冷や汗が流れるのを感じる。わざわざ校長に呼び出されて、母にこんなことを言われている。心当たりといえば、蒼士とのことしかない。不安な面持ちで亜由美の顔を見た。
「蒼士君に乱暴されているの？」
「え？」
「この手紙にね、ちーが蒼士君に、性的なことを強要されているって書かれているの」
千秋はその言葉に頭が真っ白になる。思考がついていけずに、その場に固まった。亜由美は何も言わずに、千秋が口を開けるのを待ってくれていた。千秋は何を言えばいいのか分からず、取り

あえず首を振る。
「違う。乱暴なんてされてない」
「本当に？　今すぐ答えるのが無理なら、一度家に帰ってもいいのよ」
千秋は再度言葉に詰まる。何と言えばいい。母は、もし自分が男と付き合っていると聞いたらなんて思うのか。しかもこんな状況で聞かされるのだ。
反対されるだろうか。だが、蒼士が勘違いされたままなのはまずい。千秋はごくりと唾を飲むと、テーブルに視線を落として小さな声で言った。
「違う。俺とそうちゃん、付き合ってんだ」

亜由美は何も言わない。沈黙が流れるが、それがやけに長く感じ千秋は耐えきれずに亜由美の顔を見た。
「脅されてじゃないの？　お母さんが、小湊で働いてるから気にしてる？」
「ううん。違う」
亜由美の目を見て言うと、亜由美は、そっか、と言って立ちあがり、千秋の頭をぐしゃりと撫で、千秋の隣に座った。
「好きなの？」
「うん」
「本気で？」
「うん」

「わかった。じゃあ、行こうか」
母が立ちあがるのを、千秋は呆然と見上げた。
「何？　行こうよ。時間が勿体ないわ」
「かーちゃん、何も言わないの？」
「何を？」
「俺、男の人と付き合ってるんだよ。そうちゃんと、その……エッチもしてる」
上手い言葉が見つからなくて、ストレートに言う。亜由美はそれに笑った。
「妊娠しないったって、よくないわよ。まだ高校生なんだから。でも、やっちゃったもんは戻せない。それについてはまた話そう」

「うん……いや、そう言うんじゃなくて、俺、ホモなんだ。いや、ホモじゃないけど、その……」
「そんなことどうでもいいわよ。おかあさんはちーが好き。ちーを信じてる。こんな良い子が選択したことが、悪いことなわけない」
「本当にいけない選択をしたときは、反対するけどね」と亜由美は笑うと、千秋の肩に手を置いた。
「いこっか」
「うん」
豪快で、肝が据わっている母親だとは知っていたが、ここまでとは思わなくて驚く。それと同時に、この人の息子でよかったと

心から思った。
「ありがと」
そういえば、母にお礼を言うなど久しぶりだと思いながら小さな声で呟くと、亜由美はいつもと変わらぬ笑顔を向けてきた。少し泣きたくなって、千秋はぐっと堪(こら)える。今はそんな感傷に浸っている場合ではない。
「お待たせいたしました」
亜由美は校長室に戻ると再度椅子に座った。千秋も続いて椅子に座る。
室内は、何とも言えない空気が流れていた。校長も教頭も、どこか焦ったような表情だ。

対して、蒼士の父親の健一からは何も読み取れない。さすが大企業の社長だ。肝が据わっているというのは分かった。
蒼士はというと、不安そうな顔をしていた。それはそうだろう。千秋が安心させるようにニコリと笑って見せると、蒼士も笑ってくれた。
「早速ですが、この手紙は真実とは違うようです」
亜由美が言うと、校長は困ったような顔をした。
「いえ、真実です」
突然、蒼士の父親がそう言うと、もう一人の男に目配せをした。
男は名刺を亜由美に差し出した。
「横田弁護士事務所の横田です」

「あ、はい」
亜由美が受け取ると、横田は書類を鞄から取り出してテーブルに置いた。
「愚息が大変なことをしでかしました。お詫びのしようもございません」
蒼士の父親がそう言って深々と頭を下げた。何を言い出すのかと千秋は慌てる。
「え？」
千秋が蒼士の顔を見ると、蒼士も驚いた顔をしている。勘違いをされていると思って、千秋は大げさに首を振った。
「何言ってんですか。手紙に書かれていることは嘘です」

「しかし、写真と動画がある」
千秋の弁明に、蒼士の父が低いがよく通る声で答えた。
「写真？」
千秋と蒼士が同時に呟くと、蒼士の父は、横田に視線をやった。
横田はうなずくと、鞄から写真を数枚取りだす。
「お母様はご覧にならない方がいいと思います」
そう言って横田は、蒼士に写真を渡す。蒼士はそれを受け取った瞬間、顔色を変えた。
「あ……」
蒼士は写真をめくると、口元に手をやって目を歪める。千秋は身を乗り出して蒼士に手を差し出した。

「俺にも見せて」
「駄目」
「見せてよ」
「駄目だ」
蒼士が拒否したが、千秋は蒼士の手からそれを奪い取ろうとした。しかし蒼士は千秋の手をよけると、それを横田に返した。
「なんの写真なんだよ」
「千秋君が、複数に暴行されている写真と動画です」
横田が抑揚のない声で言う。千秋はすぐにあの日のことだとわかった。
「どういうことです」

千秋が何か言う前に、亜由美の声が響く。亜由美は千秋の顔を見た後、蒼士の顔を見た。
「違う。そんなの嘘だ」
千秋が慌てて言うが、亜由美は疑いの目で千秋の顔を見てきた。
「千秋君は否定されていますが、蒼士君が行った行為は、強制性交にあたります」
「いえ、違います」
なんてことを言うんだと思って、横田の顔を見ながら千秋がきっぱり言う。
横田が千秋の顔を見てきた。メガネの下から覗かせる目はするどく、皺でたるんだ頬とは不釣り合いだ。

「千秋君は違うとおっしゃりますか。では、これは集団で行った性交渉で、双方同意の上での行為であるということですか」
「……はい」
母親が隣にいるのに、そんなことを言わないでほしい。
消え入るような声で返事をすると、横田はテーブルに出した書類を千秋の前に差し出した。
「では、その旨を署名してください。保護者のお母様のサインもお願いいたします」
「はい？　何を言ってるんですか。ちょっと、あんた、集団ってなに？」
亜由美が千秋の肩をつかむ。千秋はこんなことを母親に知られ

たくなかったと思いながら、ごめん、と小さな声で呟いた。
「サインって、これ、なんの書類ですか」
「ご自分の意思で性交を行ったことを同意する書類です。勿論、今後刑事事件にすれば無効になる可能性もあります。しかし、検事が起訴する可能性は低いでしょう」
「なんでこんな書類」
千秋が呟くと、横田はずり落ちたメガネをくいっと上げ、話を続けた。
「念のためです。蒼士君はご存じの通り、将来のある青年です。こんなことが表に出たら大変なことになります。しかし、誰が送ってきたかわからない限りは、何かあったときのための保険がほ

しいのです」
「保険って……」
「勿論、サインを頂ければそれなりのお礼はさせていただきます」
「お礼？」
千秋は眉をしかめた。
「はい。こんなことになったら、千秋君も学園にはいられないでしょう。転校するための費用、学費と引っ越し費用として、五百万円、お支払いいたします。校長先生にはご理解いただいておりますので、転校先では二年生から始められます」
「ちょっと……え……？　何を言ってるかわかりません」
千秋が呆然として呟く。一方的に話されて頭がついていかない。

「もうお読みになられたと思いますが、手紙には千秋君が蒼士君から離れなければ、写真と動画をばらまくとあります」
千秋は手紙を読んでいないので、そんなことが書かれているなど知らなかった。亜由美の顔を見ると、亜由美は無言でうなずく。
「そんな物がばらまかれたら、どんなことになるかおわかりになると思います。蒼士君や千秋君だけではありません。他にも数名、ここの生徒が写っています。こんなことが世間に知られたら、他の生徒のみならず、学園にとっても大変な事件になります。もはや、千秋君と蒼士君お二人の問題ではありません」
「何言ってんの？」
ずっと黙って聞いていた蒼士が、唸るように言葉を吐き出した。

「ちーくんを転校させるのは、もう決めてるから父さんが口を出す問題じゃない」
「いや、そういうことじゃない。申し訳ないが、千秋君は蒼士とは今後会わないでもらいたい。念のため、ご家族にも引っ越しをお願いします」
健一が静かな、しかし傲慢さを含んだ声音で言った。
「ふざけんな！」
蒼士が声を張り上げて立ちあがると、健一は「座りなさい」と小さな声で言う。しかし、蒼士に父親の言うことを聞く気配はない。
「これがどれほど大変なことかわかるか。お前は、お前の勝手な

行動で、千秋君を危険にさらしたんだ。それだけじゃない。この歴史ある学園の名を汚そうとしている。少しは自分の行動に責任を持て」
「は？　何言ってんの、父さん。美園さんを未だにパピーにしているのに、そんなこと言えるの」
「それとこれは関係ない」
「関係ない？　関係あるよ。ここが腐ってるのは今に始まった話じゃないだろ。父さん達だって散々やりまくってたくせに、なんで俺達だけが責められるんだよ」
「座りなさい」
健一が、決して大きくはないが、低く響くような声で言う。そ

れでも、蒼士は逆らったように健一を睨んでいた。
「私の時代は、こんな遊びをする者はいなかった。暗黙のルールもあり、それを破ることもなかった。お前は愚か者だ」
蒼士は相変わらず父親を睨み付けていたが、千秋がハラハラとした目で見ているのに気がついたのか千秋のそばまで来ると、千秋の手を握ってきた。
「そうちゃん？」
「いいよ、勝手にしろよ。じゃあ、俺も学校やめる。ちーくんと一緒にいく」
それに驚くこともなく、健一は落ち着いた声で続ける。
「やめる？　そんな勝手なことしたら、今後一切支援はしない。

貯金も使わせない。無一文で追い出す」
「勝手にすればいい」
「よく考えろ。お前らしくない。駆け落ちでもするか。そうしたらどうする。中卒の子ども二人、どうするんだ。しかも男同士で、生きていけるとでも思っているのか。千秋君はまだしも、お前みたいな温室育ちのお坊ちゃまが、何をできる」
「何でもする」
蒼士がぎゅっと千秋の手を握ってきた。千秋は蒼士の目を見る。
健一は、言い方こそ千秋に気を使っているが、千秋のような、どこででも生きていける貧乏人と蒼士は違うと言っているのだ。
大事に育ててきた蒼士は、しかるべき場所で、しかるべき生き

方をするべきだと言っている。そうでしか生きていけないと、言っているのだ。千秋にも、蒼士がどうにかできるとは思えなかった。

では、自分はどうか。自分も蒼士のためにならなんでもするだろう。だが、その選択が正しくないことは千秋にもわかっていた。

「それって、龍誠も写ってた？」

千秋の言葉に、蒼士は嫌そうな顔をした。

「なんで今、あいつの名前なんて言うんだよ」

「写ってるんだよね」

強い口調で聞くと、蒼士は渋々と言ったように答えた。

「写ってる」

そうならば、健一の言うとおりに自分達だけの問題ではない。自分達が巻き込んだ龍誠に、これ以上迷惑はかけられない。

「弟達に転校はさせられません」

千秋の言葉に、蒼士が千秋を見てきた。怒りに満ちた目が少しだけ和らいだのがわかる。しかしその目はすぐに、また怒りに変わるのだろうと思うと辛かった。

「千秋君、君はまだ若いからわかっていない……」

「わかっています」

千秋は、健一の言葉を遮った。

「転校するのも、引っ越すのも俺一人です。離れろというなら、沖縄でも、北海道でも行きます。でも、俺だけです。母を首にす

るなら、退職金を頂きます。それと、母に新しい働き口を提供してください」
「ちーくん、何言ってんの？」
蒼士の言葉に、千秋は蒼士の顔を見ることはしなかった。いや、できなかった。
「それはできない」
蒼士の父親がはっきりと言う。傲慢で強い言葉だ。蒼士はこの父親の元で、何度も言葉を無下にされてきたのだろう。
「俺は、小湊先輩にパピーになれって脅されました。そうじゃないと、母の仕事を取り上げると言われました。弟達も、学校にいられないと言われました。従わないといけなかったので従いまし

た。その結果がこれです。そうまでしたのに、この仕打ちですか。貴方の息子がやったことです。サインが欲しければ、その条件を受け入れてください」

「ちーくん？」

千秋の手をつかむ蒼士の手が強くなる。怖くて、蒼士の言葉は無視した。

しかし、これでいいのだと思う。蒼士には未来がある。大きな屋敷で、恵まれた生活を送り、将来は大きな会社を継ぐのだろう。結婚をして、子どもも作らなくてはいけない。

もしかすると、美園のように愛人として蒼士のそばにいることはできるのかもしれない。しかし、千秋にはそんな不誠実なこと

は耐えられない。
それだけではない。このまま自分といれば、蒼士は一人で立てなくなる気がする。千秋に依存しすぎているのだ。
これは、いい機会なのかもしれない。そうだ、これが一番良い方法なのだ。自分にそれを言い聞かせた。
蒼士の父親が横田を見てうなずいた。横田は「わかりました」と一言言う。
「どういうこと？　千秋は脅されてたの？」
亜由美が千秋に聞いてくる。怒りと悲しみの表情を浮かべる亜由美を、千秋は見ることができなかった。
「後でちゃんと話す。条件受け入れて」

「何言ってんの。お母さんには全く理解できてない。お前が一人、不利益を抱える必要はないのよ」
亜由美の言葉に、千秋は首を振った。
「これがベストなんだよ。かーちゃんも弟達も、みんな変わらない。俺だって、遠くに住むだけで、何も変わらない。お金も貰える。これでいいんだよ」
「そんなことじゃない。集団で暴行って、あんた、本当に……」
「それはないよ。ごめん、こんな息子で」
亜由美はどうすればいいのか迷っているような顔をしたが、書類を渡されると、それに目を通し始める。
「ちーくん、冗談だよね。駄目だよ、何言ってんの」

千秋はようやく蒼士の顔を見た。不安そうに揺れる瞳がある。またこんな顔をさせてしまうのかと思いながら、その目を見つめ返した。

「そうちゃん、前にさ、この学園でならなんでもできるって言ったよね。でも、やっぱりそんなの幻想なんだよ。俺達は子どもでしかない。なんの力もない」

歪んだ関係はいつか壊れる。そう思っていた千秋の考えは、恐らく間違ってはいなかったのだろう。後ろめたさのある関係ならば、尚更そうだ。

「そんなの、間違ってる。俺は、やだ。絶対に離れたくない」

「駄目だよ。もう終わりなんだ。おままごとはもう終わり」

千秋はそう言って、亜由美の顔を見る。
「どう？　大丈夫そう？」
「多分大丈夫だと思うけど、すぐにサインはできない。そもそもアンフェアーじゃないの。あちらはすでに情報を持っていて弁護士を連れてきている。お母さんも、弁護士を頼んだ方がいいのかもしれない」
「そんな金……」
「いいのよ」
亜由美が書類を返すと、横田は相変わらずの淡々とした様子で答える。
「依頼人は忙しいので、次回となるといつになるかわかりません。

また、そうなるとリスクが増えますので、お支払いできる額も、もっと少なくなります」
脅しだ。千秋にも分かった。きっとそれでも母は断るだろう。
千秋は書類をひったくると、それにサインをした。
「裏切るの？」
蒼士の顔を見た瞬間、千秋は背筋がすっと凍り付いた。今まで一度も見たことのない、激しい怒りの表情。千秋の脳裏に、四肢が引き千切られた自分の姿が浮かんだ。
蒼士は千秋の手を離すと、千秋の頭を両手で押さてきた。なんだと思う間もなく。左耳に齧り付いてくる。
「っ……！」

ギリギリと蒼士の歯が食い込んでくるのがわかった。亜由美が悲鳴を上げるのと同時に、蒼士の父親と横田が蒼士の体を押さえつけるが、蒼士は離さない。

ブチッと音がしたが、痛みは感じなかった。目を見開いて蒼士の顔を見ると、蒼士の唇には血がついている。

「何してんの！」

亜由美が千秋の顔を自分の方に向けようとする。千秋はそれに逆らい、蒼士の顔を呆然と見つめる。

蒼士は血のついた唇を開けると、耳たぶごと噛み千切ったピアスを見せてきて、それを飲み込んだ。

「そうちゃん？」

そして掌をこちらに向けてくる。それは千秋の手に向けられているると気がついて、千秋はゆっくりと左手を蒼士に差し出した。

「指も欲しいの？」

蒼士は答えずに、千秋の顔を見ている。その顔にあるのは興奮ではない。ただ、静寂と怒りが混じっていた。

「いいよ、あげる」

蒼士の口元に左手の中指を持って行くと、蒼士が口を開ける。このまま食い尽くされるかと思ったが、すぐに亜由美の叫び声と共に、体を蒼士から引き離された。

あとは、何がなんだか分からなかった。暴れる蒼士を抑えるのには、大人の男二人では無理だ。更に教頭が加わり、校長はどこ

かに電話をかけた。
千秋の体は亜由美が押さえつけている。母の小さな体を振り払うことは、千秋にはできなかった。
部屋には数人の教師が入ってきて、蒼士を押さえつけた。千秋は校長に部屋の外へ連れ出され保健室に連れて行かれるが、全て、どこか他人事のようだった。
「どうしたの？」
養護教員が、ぎょっとした顔で千秋を見てくると、傷口を消毒してガーゼを当ててくれる。
「病院へ行った方がいいですね」
「誰かに車を出させましょう」

校長が再度、どこかに連絡をすると亜由美に首を下げた。
「申し訳ございません」
「いいえ、校長先生のせいではありません」
亜由美は千秋の肩を撫でながら、何かを考えるように床をじっと見ていた。
「車、出せます」
男性教員が顔を出したので、亜由美は千秋の肩をポンポンと叩いて立たせると、校長の顔を見た。
「先ほどのお話、お受けすると小湊さんにおっしゃってください。蒼士君を、この子に近づけさせたくはありません。明日、この子はここから連れて帰りますから、蒼士君を千秋には絶対に近づけ

させないでください。手続きは後ほど行います」
亜由美の言葉に、もうこれで蒼士には会えないのだろうと思いながら、千秋は千切れた左の耳に触れた。